

調査報告

インドネシアにおける保健医療従事者の気になる子どもの認識調査

八田早恵子¹⁾, 金城やす子¹⁾, 鯉淵乙登女¹⁾

Survey of Health Staffs on Indonesian children with developmental disabilities

Saeko HATTA¹⁾, Yasuko KINJO¹⁾, Otome KOIBUCHI¹⁾

要 旨

本調査ではインドネシアS州B県の6か所の保健所研修に参加した保健医療従事者69名を対象に、発達障害児についての集合調査を実施した。質問項目は、発達障害という言葉の認知、障害を持った子どもの有無、障害の種類、気になる子の存在(乱暴な行動をとる、あいさつをしない等)、発達障害児との関わりの有無、発達障害児の対応で困ったこと、対応時の工夫等の8項目で構成した。本調査から、就学前の子どもの接する機会の多い保健ボランティアは、発達障害という言葉は知っているが、実際に発達障害児に接しているかどうかでは17人(71%)が周囲にはいないという認識であり、発達障害に関する十分な知識を持ち合わせていないことが明らかになった。気になる子どもの存在については、暴力的な行動をとること、パニック状態、自己主張が強いなどとの認識があり、さらにその対応にも困難感を感じていた。特にADHD児の傾向をもつ乱暴な行動や相手の気持ちを理解できない子どもへの対応について困難感を抱えていた。保健医療従事者が求める支援としては、「気持ちへの近づき方」等の意見から、発達障害をもつ子どもへの接し方、子どもの具体的な支援の方法等のサポートシステムを検討する必要がある。今後は、専門的な知識を持ちながら子どもに直接関わる助産師看護師等の保健医療従事者を対象に調査を進め、発達障害児に対する困難感、具体的な支援の方法、支援ニーズについて調査を進めていきたい。

キーワード: インドネシア, 発達障害児, 保健ボランティア, 助産師

Abstract

We conducted an aggregative research on 69 participants of health staffs in the training program of 6 public healthcare centers in Indonesia. The questionnaire contained 8 questions: recognition of the word 'developmental disabilities', existence or non-existence of children with such disabilities (impairments), types of disabilities, existences of noticeable children (who conduct violent behaviors, do not greet, etc.), experiences of having been involved with children with developmental disabilities, difficulties experienced in dealing with children with developmental disabilities, etc.

This research revealed that those health volunteers know the word 'developmental disabilities', but in terms of whether they have been involved with children with developmental disabilities, 17 (71%) think they do not have them around, and they do not have adequate knowledge about developmental disabilities. However, in terms of noticeable children, their perceptions were, 'conducting violent behaviors', 'going panic', and 'being self-assertive', and they had difficulties to deal with such attitudes of children. However, many healthcare and medical

¹⁾ 名桜大学人間健康学部看護学科 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Department of Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Meio University 1220-1, Bimata, Nago, Okinawa, 905-8585, Japan

personnel have sense of difficulty to deal with children with developmental disabilities, and in reality, their checking procedure is not effectively conducted. As for the supports the healthcare personnel feel in need of, some suggested 'financial support', but from their comments on 'how to become close to their minds', it is thought necessary to provide support system in specific methods of supporting children and such. In the future, we hope to conduct researches on the professional healthcare and medical personnel such as maternity nurses who have direct contacts with children with their specialized knowledge, and study their senses of difficulties in dealing with children with developmental disabilities, specific support methods, and support needs to create a support program for healthcare and medical personnel.

Keywords: Indonesia, children with developmental disabilities, health volunteers, Midwives

I. はじめに

近年、発達障害のある子どもについては、できるだけ早期から発達段階に応じた支援が重要であり、我が国においては発達障害者支援法に発達障害を早期に発見し、発達支援を行う国等の責務が明記された（平成16年12月10日法律第167号）。諸外国の発達障害に関する研究についてSkounti, Philalithis & Galanakis (2007) は、スウェーデン、オランダ、イギリス、スペイン等の欧州、イスラエル、カナダ、米国、オーストラリア等、そして日本、台湾、タイでの報告があると述べている。

また、先進的と考えられる米国、英国、フィンランドでは発達障害児等の早期発見・早期支援の取り組みが行われている（棟方、梅津、玉木、斎藤2010）。一方、世界第4位の人口を持つインドネシアでは、小児神経科医から発達障害の受診者が増加しているという報告はある（榊原、清水2005）が、総数等関連したデータや研究は、まだ少ない。Alisjahbana, Djais, Sofianti, Setiabudi, Purnama, Zefanja & Krisnaldi (2003) は、1980年までは、発展途上国を対象とした子どもの援助プログラムへの莫大な投資の目的は、主に子どもの生存であったと述べている。しかし、子どもの発達プログラムの本来的な目的は、子どもの身体的、知的、社会的、情緒的な発達を促進するものであると指摘している。ユリンドラサニ (2012-a) は、インドネシア政府が2001年から保育・幼児教育を重要視し、教育文化省に保育・幼児教育総局を創設したことを報告している。さらに保育・幼児教育施設の就園率を上げるべく努めてきたが、まだ課題として量的な面を強調しているとも述べている。

33の州から成るインドネシア共和国の総人口は、2億4,864万人（2012年）で、幼児（0～6歳児）人口は3,180万4,759人で総人口の13.26%を占めている。現在、発達障害児者は、人口の1%とも云われているが、ユリンドラサニ (2012-b) は、インドネシアの保育・幼児教育の課題は、保育者の資格基準が一定ではないこと、子ども

の発達基準のガイドラインが保育者に標準化されていないこと、保育・幼児教育を受ける機会の地域的不均衡があること、保育・幼児教育に関する親の認識が異なることなどを報告している。七木田・増田 (2006) は、2004年にインドネシア特別支援教育協会の「特別な支援が必要な子どものための小児科学、心理学、医療サービスの連携」というシンポジウムが開催され、小児科医より発達障害児の早期発見の意義について話されたが、実情について報告した研究は極めて少ないと述べている。

また、インドネシアの医療保健状況は、人口に比例して病院や保健所、保健医療従事者数も不足している。1980年代に全国の地域で、高い乳児死亡率を減少させる目的の元にポシアンドゥ (Posyandu: Integrate Service Post:地域統合サービスポスト) という地域母子保健活動が始まり、現在も続いている。ポシアンドゥにおいて保健ボランティアおよび保健所の看護師や助産師は、5歳以下の子どもたちの身体的発達チェックを行うことが義務付けられているが、あまり行われていない実態がある。そこでインドネシアの地方で乳児・幼児に対応する保健医療従事者が発達障害児に対し、どのように認識しているかについて明らかにしたいと考えた。

II. 方法

(1) 研究方法：質問紙調査

質問項目は、先行文献を参考に研究者が作成し、①発達障害という言葉の認知、②周囲の障害を持った子どもの有無、③障害の種類、④気になる子の存在（乱暴な行動をとる、あいさつをしない、意味もなく走り回る等）、⑤発達障害児との関わりの有無、⑥発達障害児の対応で困ったこと、⑦対応時の工夫、⑧発達障害児に必要な支援の8項目で構成した。

(2) 調査対象者

インドネシアS州B県の6か所の保健所研修に参加し

た保健医療従事者69名を対象に、集合調査を実施し、以下に記載する倫理的配慮を説明し、その場で任意提出とした。

(3) 倫理的配慮

調査は、S州B県保健局長、ヘルスプロモーション部長に、調査の主旨および調査への参加は自由意志であること、参加しなくとも不利益を被ることはないこと、個人が特定されることはないこと、調査結果は研究の目的以外に使用しないこと、調査は学会等に公表されることを説明し、了承を得た。また調査対象者には、集合調査を実施時に、上記と同様の説明を行い、質問紙の提出を持って調査対象者の同意を得たこととする旨説明した。当研究は、名桜大学全学研究倫理委員会の承認を得ている（承認番号：27-004-A）。

(4) 用語の定義

- ・気になる子ども：医療者、保育また教育の現場では発達障害を包括する概念であると認識されているが、全ての「気になる子ども」が発達障害と診断されるわけではなく、個人差や成育環境の不安定さへの表れとも考えられる（大河内・田高，2014）。インドネシアでは発達障害の確定診断はほとんどなされていないため、保健医療従事者が、発達という視点から行動が気になると感じたり、思う子どもとした。
- ・発達障害児：自閉症を含む広汎性発達障害（ASO）、注意欠如他動性障害（ADHD）、学習障害（LD）を持った子どもとした。
- ・保健医療従事者：基本的には資格のある医師、看護師、助産師、公衆衛生士等が対象であるが、今回は子どもの保健医療に関わる関係者ということで、保健ボランティア、幼稚園教師、村役場職員も含めた。

III. 結果

調査対象者は、助産師10名、保健ボランティア26名、公衆衛生士等の保健所スタッフ11名、村役場職員14名、幼稚園教員8名であった（図1）。

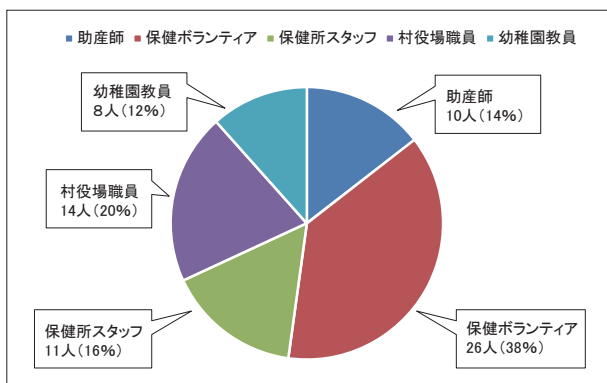


図1. 調査対象者内訳

『①発達障害という言葉の認知』では、「知っている」と回答したものが86%（59名）、「いいえ」が14%（10名）であった（図2）。

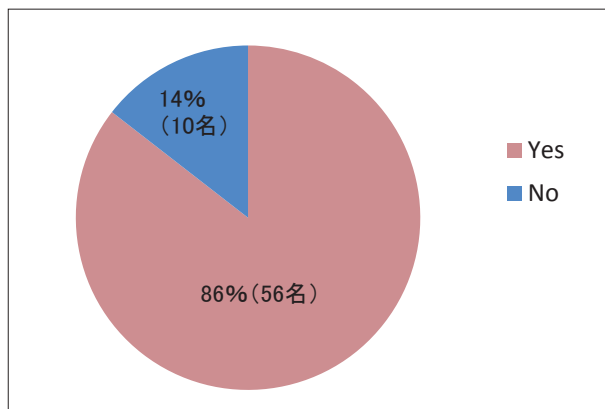


図2. 発達障害という言葉の認知

『②周囲に障害を持った子どもの有無』では、「はい」が39%（27名）、「いいえ」が61%（42名）であった（図3）。

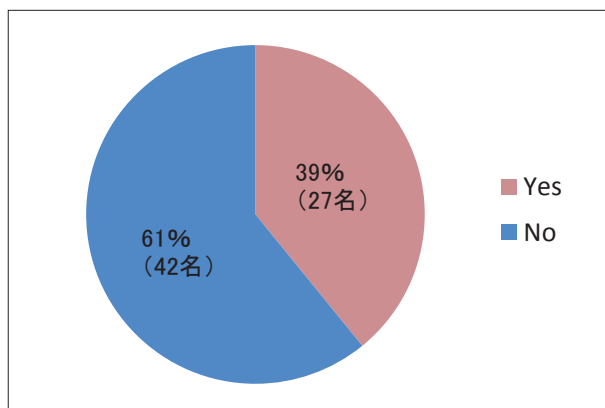


図3. 周囲に障害を持った子どもの有無

『③障害の種類』については、自閉症、ダウン症候群、聾啞、2、3歳だが話せない、立てない、歩けない、食べられない、栄養不良、他の子を怖がる、他の子と遊べない等であった。

『④気になる子の存在』の内訳は、乱暴な行動をとるが23名と最も多く、ついでけんかをして自分主張ばかりで、相手の気持ちを理解できないが21名、すぐに泣き叫んでパニックになるが19名、あいさつをしない、意味もなく走り回るが14名であった（図4）。

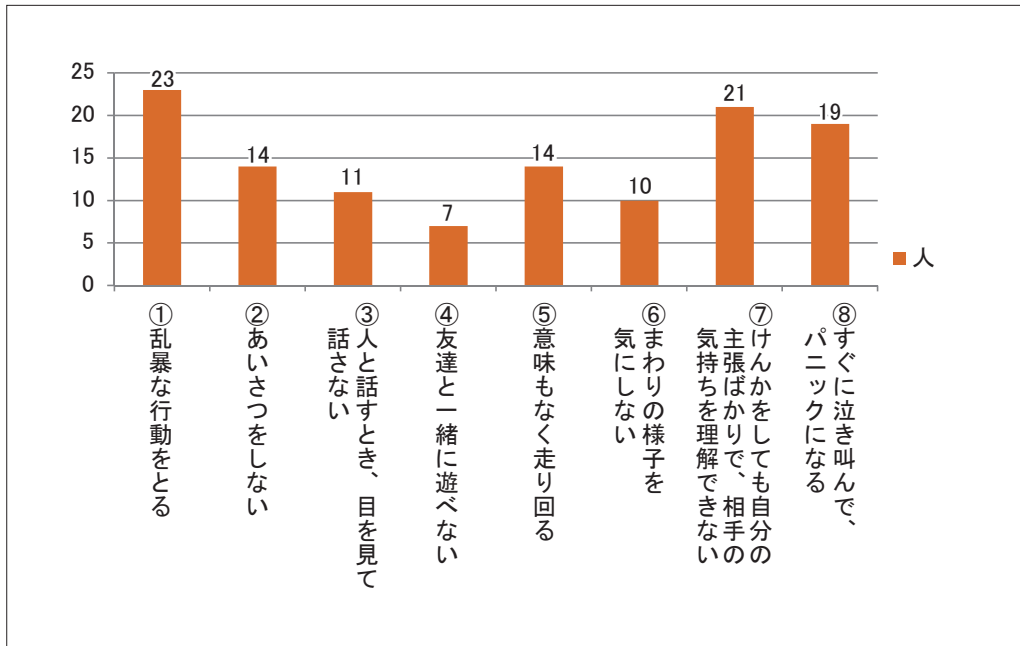


図4. 気になる子の存在

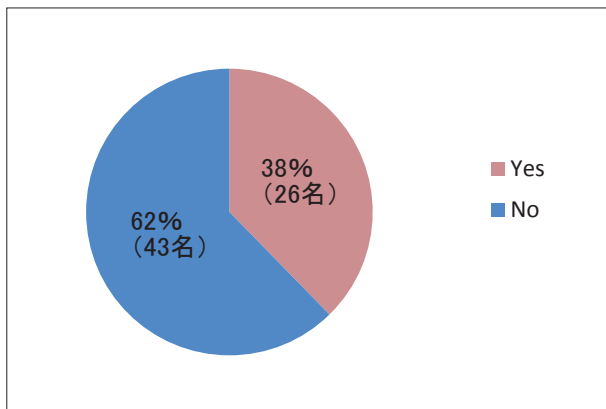


図5. 発達障害児との関わりの有無

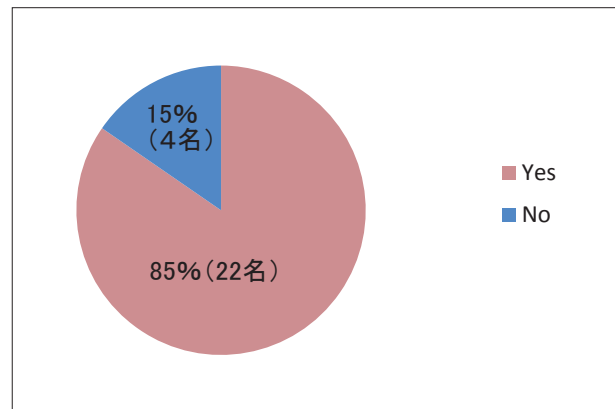


図6. 発達障害児の対応で困ったこと

『⑤発達障害児との関わりの有無』についてを尋ねた結果、「はい」が10%（26名）、「いいえ」が10%（43名）であった（図5）。

発達障害児に接したことがあると回答した26名に、『⑥発達障害児の対応で困ったこと』があったのかどうかを尋ねた結果、「あった」と回答したものが、85%（22名）で、「なかった」は15%（4名）であった（図6）。

発達障害児への『⑦対応時の工夫』について自由記述で尋ねた。「注意して対応する」、「忍耐を持って子どもを敬う態度で接する」、「ほっておく」、「忍耐強く接しなければならない」、「その子の状態に合わせて、よく観察する」、「障害児対象の学校に入れる」等の記載があった。

『⑧発達障害児に必要な支援』の自由記述では、「不足しているところを補うような手助け」、「遊べる広い場所

と注意深い観察」、「指導、気持ちへの近づき方と技術」、「予算的なサポート」、「高度な観察指導」等があげられた。

IV. 考察

本調査から、就学前の子どもに接する機会の多い保健ボランティアは、発達障害という言葉は知っているが、実際に発達障害児に接しているかどうかでは17人（71%）が周囲にはいないという認識であり、発達障害に関する十分な知識を持ち合わせていないことが明らかになった。障害児については、身体的な障害と知的障害を主とした障害を区別して認識していた。しかし、気になる子どもの存在については、暴力的な行動をとること、

パニック状態、自己主張が強いなどとの認識があり、さらにその対応にも困難感を感じていた。特にADHD児の傾向をもつ乱暴な行動や相手の気持ちを理解できない子どもへの対応について困難感を抱えていた。前述したがインドネシアでは、病院や保健所以外にポシアンドゥ（Posyandu : Integrate Service Post:地域統合サービスポスト）という地域母子保健活動において、保健ボランティアおよび保健所の看護師や助産師は、ポシアンドゥに来る子どもたちの身体的発達チェックを行うことが義務付けられている。しかし実際には行われていないことが多く、資格のある看護師や助産師は元より、保健ボランティアが発達チェックを行うことは難しいが、気になる子どもの存在を見つける力は持っていると考えられる。また、発達障害児の対応に対して困難感を持っている看護師や助産師が多く、実際には効果的な発達チェックが行われていない。保健医療従事者が求める支援としては、自由記述から予算的なサポートに対する意見もあったが、「気持ちへの近づき方」等の意見から、発達障害をもつ子どもへの接し方、子どもの具体的な支援の方法等のサポートシステムを検討する必要があると思われる。

棟方ら（2010）が述べているように、発達障害児の早期発見とその支援体制についてはまだ揺籃期にあると思われる日本や、先進諸国である米国、英国、フィンランドにおいても、一番子どもたちに近い存在である医療保健従事者および教育者、保育者の果たす役割は大きく、それはインドネシアにおいても同様だと考える。

V. 終わりに

今回は保健ボランティア、保健所スタッフ、幼稚園教師らを含む保健医療従事者として調査したが、今後は、専門的な知識を持ちながら子どもに直接関わる助産師や看護師等、また保健ボランティアを対象に調査を進め、発達障害児に対する困難感、具体的な支援の方法、支援ニーズについて調査を進め、保健医療スタッフを対象にした支援プログラムの作成に取り組みたい。

謝 辞

本研究は名桜大学総合研究所2015年度（平成27年度）一般研究の助成を受けて実施致しました。本研究にご協力いただいたインドネシアの関係者の皆様、総合研究所の皆様に感謝致します。

引用参考文献

- ALISJAHBANA A. DJAIS J. SOFIANTI E. SETIABUDI Budi. PURNAMA D. ZEFANJA F. & KRISNALDI N. (2003) Early Childhood Care & Development in Indonesia Preparing the Future Generation, 小児保健研究, 62 (4), pp.446-455
- 水野智美・徳田克己(2014) 「うちの子、ちょっとヘン？」 発達障害・気になる子どもを上手に育てる17章, 福村出版
- 棟方哲弥・梅津亜希子・玉木宗久・斎藤由美子 (2010) 諸外国における発達障害児等の早期発見・早期支援の取り組み—米国,英国,フィンランドを中心に—,国立特別支援教育総合研究所研究紀要 (37)
- 七木田敦・増田貴人 (2006) インドネシアの通常小学校における発達性強調運動障害の実際, リハビリテーションスポーツ, 25 (1), p.37
- 西館有沙・徳田克己 (2014) 配慮の必要な保護者への支援, 学研
- 大河内彩子・田高悦子 (2014) 「気になる子ども」の概念分析—保健・医療・保育・教育職の認識—, 横浜看護学雑誌, 7 (1), pp.1-8
- PEDOMANPELAKSANAAN Stimulasi, Deteksi dan Intervensi Dini Tumbuh Kembang Anak Ditingkat Pelayanan Kesehatan Dasar, (2014) KEMENTERIAN KESEHATAN RI
- 榎原洋一・清水教一 (2005) 広汎性発達障害に対する各国の取り組み, 脳と発達, (37), 239-240
- SKOUNTI M. PHILALITHIS A.& GALANAKIS E. (2007) Variations in prevalence of attention deficit hyperactivity disorder worldwide, Europe Journal of Pediatric, 166, pp.117-123
- 徳田克己・水野智美 (2012) 気になる子の保育, チャイルド本社
- ユリンドラサニ (2012a) インドネシアの保育・幼児教育：政策と課題第1部<<http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/45.html>> (2016年6月25日検索)
- ユリンドラサニ (2012b) インドネシアの保育・幼児教育：政策と課題第2部 <<http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/46.html>> (2016年6月25日検索)